

ビザンティン貴族詩篇写本（ボドリアン図書館所蔵 バロッチ 15 番）について

太 田 英侖奈

A Byzantine Aristocratic Psalter (Bodleian Library, MS. Barocci 15)

Erena OTA

Abstract

The manuscript Barocci 15 in the Bodleian Library, Oxford, is one of the rare example of a byzantine psalter manuscript which we can be sure of its production date (1104/05). Its miniatures fall into the category of the so-called 'aristocratic' psalters, such as the 'Paris Psalter'(10C), but they were not discussed in detail until today. In this paper, a summary of the manuscript and a detailed discussion on the iconography of the miniatures will be given based on the survey of the actual manuscript by the author. The frontispiece of Barocci 15 depicting King David with an icon of the Virgin, seems to be the only surviving aristocratic psalter which David's portrait serves as a donor portrait. The miniature of 'Crossing of the Red Sea' shows an incomprehensible space between Moses and the Israelites, making it an unusual representation of the scene. Barocci 15 has a simple miniature programme and the quality of its parchments are not at the highest, but its miniatures are worth noting in terms of iconography. Finally, a scope for the comparison of Barocci 15 and three other manuscripts approximating the former both in production date and style of the miniatures, namely MS gr. 3 in the Houghton Library at Harvard, will be considered.

はじめに

旧約聖書諸本を収録したあらゆるビザンティン写本のうち、最も多数を占めるのは詩篇写本である⁽¹⁾。オックスフォード大学ボドリアン図書館が所蔵する詩篇写本バロッチ 15 番⁽²⁾（以下当写本）は、fol. 36v 以降のパスカル・テーブルにより制作年（1104/5 年）が判明する数少ないビザンティン詩篇写本の一つである。その挿絵は《パリ詩篇》（10 世紀）に代表されるいわゆる貴族詩篇グループに属するものであるが、カトラー⁽³⁾、スパタラキス⁽⁴⁾、フッター⁽⁵⁾らの先行研究では最低限のディスクリプションが行われた程度で、図像の詳細な分析は未だ成されていない。本論文ではまず筆者がボドリアン図書館で当写本を 2 度にわたって実見調査した際の観察結果をもとに、当写本の概要を述べたのち、主要な挿絵の図像学的な分析を行う。最後に、当写本と

制作年代が近似し、挿絵の内容も類似する 3 写本を挙げ、当写本を含めた 4 写本を研究する意義を述べる。なお、本稿における詩篇の番号と内容は七十人訳聖書に基づく。

写本概要

当写本は 394 フォリオからなる。縦 15.5cm、横 10.5–11.5cm とビザンティン写本としては小型であり、貴族詩篇としても小ぶりのサイズである⁽⁶⁾。ただし、後述するギリシア数字のクワイア・ナンバーの下端が不自然に切れているフォリオ（64r, 72r, 80r, 128r, 184r, 192r）があるので、本来はもう少し大きな写本だったと思われる。現在は茶色い革で装丁され、天・地・小口の部分に赤い十字架や円形など幾何学的な文様が描かれている（図 1）。本文はミナスキュール体で、1 コラム 16 行に書かれる。コロフォンはないものの、fol. 36v 以降に開始年

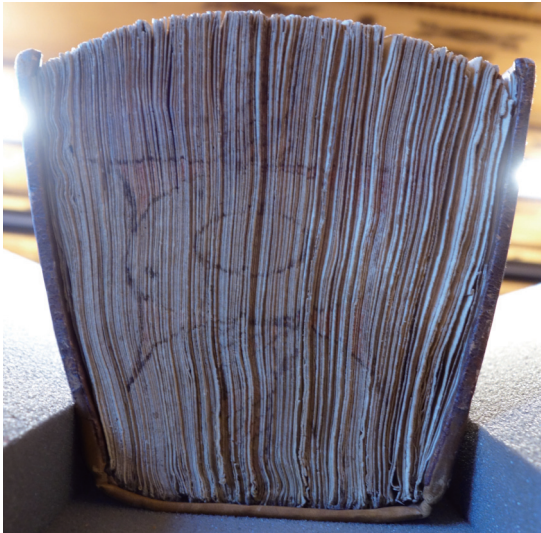


図1 バロッチ 15 番、地部分の文様

1104/5 年、終了年 1139/40 年のパスカル・テーブルがある。通常、パスカル・テーブルの開始年もしくは直後の年が写本の制作年とされるため、当写本も 1104/5 年に制作されたものと云える。テキストの主要部分は詩篇と頌歌が占める。fol. 342v をはじめ、複数のフォリオの余白にギリシア語による後代の書き込みが見える。詳細な内容は以下の通りである（ゴシック体は挿絵）。

fols. 1r–9v : カイサリアのバシリオス、『詩篇講話』(CPG⁽⁷⁾ 2836)

fols. 9v–11v : キロスのテオドレトス、『詩篇注解』(CPG 6202)

fols. 11v–14v : περι τῶν ὑποθέσεων τῶν ἀναβαθμῶν.

fol. 14v–15v : Περι τῆς ἐκθέσεως τῶν ψαλμῶν.

fols. 15v–17v : ヨシポス『記憶の助け』(PG 106: 15–176)

fols. 17r–19r : τίνες ἡρμήνευσαν τὸ ψαλτήριον καὶ πόσοι καὶ πότε;

fol. 19r–19v : ἐρμηνεία τοῦ διαψάλματος.

fol. 20r–21v : Τί ἐστὶ ψαλτήριον καὶ τί ἐστὶ δεκάχορδον ψαλτήριον.

fols. 22r–28r : コスマス・インディコプレウス テ『詩篇序文』

fols. 28r–30r : λόγος περὶ θεολογίας.

fols. 30r–33v : ἕτερα ὑπόθεσις περὶ πίστεως.

fol. 33v : パスカル・テーブル序

fols. 34r–35v : パスカル・テーブル

fol. 36v : パスカル・テーブルへの註釈

fols. 36v–39r : パスカル・テーブル

fol. 39v : ダヴィデの肖像⁽⁸⁾ (全頁大)

fols. 40–195v : 詩篇 1–76

fols. 196r–342v : 詩篇 77–151

fol. 343r : ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ⁽⁹⁾ (全頁大)

fol. 343v : 紅海渡渉・溺れるエジプト軍⁽¹⁰⁾ (全頁大)

fols. 344r–378v : 頌歌

fols. 378v–380v : エオティノン讃歌

fols. 381r–391v : 様々な月、パスハ、時課の計算への解説

fols. 391v–394v : イエス・キリストへの祈りの解説
なお、当写本のフォリオのナンバリングは、fol.

13v の右上で「23」から開始する茶インクのアラビア数字のもの⁽¹¹⁾と、fol. 1r の右上で「1」から開始する鉛筆書きのアラビア数字のものとのがあるが、本稿では後者を採用する。ただし、なぜか fol. 8 と fol. 9 が同一のフォリオに纏めて fol. 8–9 というナンバリングをつけられており、ボドリアン図書館のオンライン・サービスもこのナンバリングに従っている。また、fol. 40r から fol. 192r まで、1クワイアごとにギリシア数字で 1 (α) ~ 20 (κ) までのクワイア・ナンバーがフォリオの左下端に書き込まれている。40 フォリオ目からクワイア・ナンバーを記載するというのは奇妙であるが、このフォリオから詩篇の本文が開始するので、おそらくテキストを書写する際に fol. 40r–fol. 192r までが一まとまりとして写字生に与えられたと考えられる。しかし 20 とナンバリングされたクワイアの最終頁にあたる fol. 199v に書かれているのは全詩篇のちょうど中間にあたる詩篇 77 (78) 29 節の途中まで⁽¹²⁾であり、クワイアの開始箇所と異なって切りの悪い場所で終わっている。また、次の fol. 200r から筆蹟が違っているようにも見えない。いずれにせよ、当写本全体を一人の写字生が担当したのではなく、何名かの写字生に任意のクワイアが配られて制作が進められていた過程がうかがえる。そうであれば、このクワイア・ナンバーは写字生が独自に書き込んだものであるかもしれない。

当写本はヴェネツィアの数学者フランチェスコ・バロッツィ (Francesco Barozzi, 1537–1604) とその甥にして後継者のヤコポ・バロッツィ (Jacopo Barozzi, 1562–1617) が形成したコレクションに旧蔵されていた。その後、ヘンリー・フェザーストンなる者が全 244 写本からなるバロッツィ・コレ

クションを購入し、これを 1628/29 年にロンドン・ハウスに預託した。最終的に、第 3 代ペンブルック伯ウィリアム・ハーバートがバロッチ・コレクションを買い上げ、1629 年にオックスフォード大学に寄贈し、現在に至る⁽¹³⁾。なお、理由は不明ながら旧蔵者の姓である Barozzi は今日ボドリアン図書館におけるコレクション名としては Barocci と表記されている。

挿絵

以下、当写本の挿絵について詳述する。なお、「詩篇 1 篇」のテキストの直前にはヘッドピース、「バシリオスによる詩篇序文」、「詩篇 77 篇」、「第一頌歌」にはそれぞれ直前に帯状ヘッドピースが描かれているが、いずれも植物文である上に人物像を含まないため、本稿では考察から除く。

「ダヴィデの肖像」(fol. 39v、図 2)

当写本のフロンティスピースである。金地にオレンジ、青、紫、緑の双葉形のモチーフが繰り返される豪華な枠は、モザイク装飾を思わせる。枠の底辺の両側には、植物文様を加えられている。赤い下塗りに金箔を置いた背景の上に、ダヴィデ、聖母子イ



図 2 ダヴィデの肖像

コン、建築物などが描かれている。ダヴィデは王冠を被り、赤いディヴィティシオンの上に青いマントを纏い、髯をたくわえた皇帝の出で立ちで表されている。ダヴィデの顔はほとんど剥落してしまっているが、目鼻や口の下描きが見えており、右手にある聖母子イコンに視線をやっているように見える。手に開かれた冊子本を持っているが、開かれたフォリオの部分には何も書かれていないようである。ビザンティンの伝統においてダヴィデは預言者の一人に数えられ、《シノペ福音書》(フランス国立図書館、Supplément grec 1286、6 世紀)⁽¹⁴⁾などではは預言者のアトリビュートである卷子本を手にした姿で描かれるが、詩篇の挿絵においては通例卷子本ではなく冊子本を手にする。これは、ダヴィデの詩篇の著者としての性格を強調するためであろう。実際、この挿絵と向かい合うフォリオから詩篇が開始するため、このダヴィデは著者肖像を兼ねているのである。写本を手にした皇帝の装いのダヴィデは貴族詩篇におけるダヴィデの肖像として典型的であり、ベルリン大学、Abteilung für christliche Archäologie und kirchliche Kunst, cod. 3807 など多くの作例に見いだせる⁽¹⁵⁾。ところが、当写本の fol. 39v は単なるダヴィデの肖像ではなく、聖母子イコンを拝するダヴィデである。赤い線で囲われた聖母子イコンは、やはり顔の部分が剥落してしまっているが、左手で幼子を示すマリアと母に手を伸ばすキリストの仕種から、デクシオクラトゥーサ型であると知れる。当然、ダヴィデの時代にマリアもキリストもまだ現れてはいないので、ここではある種のアナクロニズムが起きているのである。このように、ダヴィデ単独ではなく聖母子イコンを伴うダヴィデの著者肖像を有するのは 54 冊⁽¹⁶⁾ある貴族詩篇のなかでも当写本のみである。類似するものとして、ハーヴァード大学ヒュートン図書館ギリシア語 3 番 fol. 8v の「デイシス」の左端に小ぢんまりとダヴィデが描かれた例がある (図 3)。

さらに注目したいのが、当フォリオのダヴィデが冊子本を手にしている点である。写本のジャンルは異なるが、《テオファニス福音書》(メルボルン、ナショナル・ギャラリー・オブ・ヴィクトリア、Folton 710/5、1125–1150 年ごろ)⁽¹⁷⁾の fol.1v には制作者の修道士テオファニス福音書を聖母子に献呈している場面が描かれている (図 4)。先に挙げたヒュートン図書館ギリシア語 3 番 fol. 8v ではダ

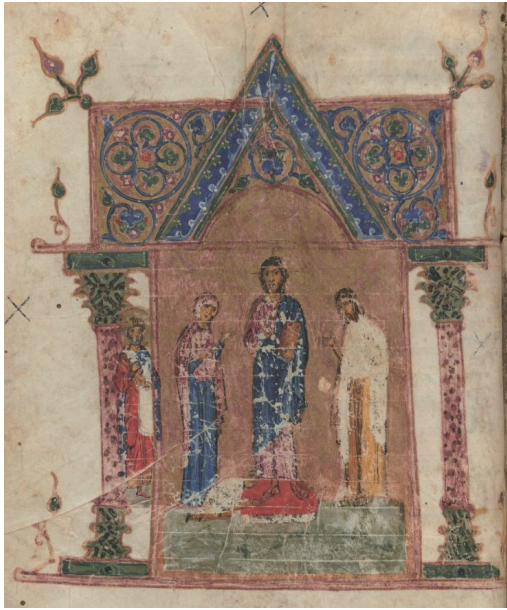


図3 「デイシス」、ヒュートン図書館ギリシア語3番

であろうか。ダヴィデと聖堂の間には紫の屋根を頂くアーケードがあり、アーチの内側には木々が描かれている。アーケードはダヴィデの背後にある建物と聖堂を繋ぐ^{コリドー}通廊であるようにも見える。このアーケードの真下、つまりダヴィデの右足下は絵具の剥落が激しく、何が描かれていたのか判然としない。カトラーはもし寄進者像があったとしたらここに描かれていたはずと述べる。たしかに先述のハーヴァード大学所蔵詩篇のフロンティスペースにはプロスキニシスのポーズをとりキリストの足に触れる寄進者が描かれているが、当写本では少なくともダヴィデの立つ足台周辺には寄進者の手が見えず、右側の建築物の階段左下などにところどころ青い絵具が残るのみである。

ダヴィデの頭上に $\delta\ \text{προ(φ)ήτης}\ \delta\alpha(\upsilon)\iota\delta$ (預言者ダヴィデ)、聖母子イコンの上部に $\mu\eta(\tau\eta)\rho\ \theta(\epsilon\omicron)\upsilon$ (神の母) の銘文がそれぞれ白い絵具で書かれている。



図4 「聖母に福音書を献呈するテオファニス」、《テオファニス福音書》

「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」 (fol. 343r, 図5)

金地の枠を上下二段に分け、上段にダヴィデとゴリアテの闘い、下段に斬首されるゴリアテを表す。カトラーは「四隅に退化した植物文様のある金地の外枠と、同じ色の内枠⁽¹⁸⁾」があると言っているが、筆者が実見した結果そのように見えているのは343vの外枠の絵具が滲み出したものであると判明した。したがって、カトラーが主張する左外枠と左内枠の間に空いた奇妙な5mmの隙間というものは存在しない。

本挿絵の直前の fols. 342r-342v には詩篇 151 篇が書かれている。詩篇 151 篇はマソラ本文には含まれないが、七十人訳聖書の多くの写本に存在する⁽¹⁹⁾。内容はダヴィデが自らの王位継承の経緯と「ペリシテ人」(ゴリアテ)を討ち取ったことを語るものであり、その題書きには「この詩篇は、本編に含まれないとはいえ真にダヴィデの手になり、ゴリアテとの一騎打ちの際に作られた⁽²⁰⁾」とある。つまり、この上下二段の挿絵は詩篇 151 篇の挿絵として機能しているのである。ダヴィデとゴリアテの闘いとその後ダヴィデに首を斬られるゴリアテは貴族詩篇においては珍しい挿絵ではなく、どちらか一方のエピソードの挿絵を含む貴族詩篇は、全58写本中23写本と半数近くを占める。ダヴィデとゴリアテの闘いは列王書第一(サムエル記上⁽²¹⁾)に初出す

ダヴィデは冊子本ではなく巻子本を手に行っているところを見ると、当写本の場合、ダヴィデは単に聖母子イコンの傍らに立っているのではなく、自ら著した詩篇を聖母子に献呈していると解釈した方が妥当なのではないだろうか。

ダヴィデの背後には背の高い建築物、画面右にはドームらしき構造を持つ建築物がある。後者は聖堂



図5 「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」

るエピソードであり、詩篇ではこの 151 篇を除いては言及されていない。列王書第一自体ではサムエルによって塗油されたベツレヘム出身のダヴィデが王権を手に入れる顛末が語られており、「イスラエルからこの屈辱を取り除く者²²⁾」(17: 26) や「僕は父の羊を飼う者です」(17: 34) など、ダヴィデを救世主の予型と解釈できる文言が多く登場する書である。ゴリアテとの決闘は、物語上のクライマックスであるだけでなく、ダヴィデがサウル王から大金と王女を下賜され、かつ父エッサイ——その血筋から後にキリストが出る——の家に「イスラエルにおいて」特典が与えられる契機となったという点で、救済史上極めて重要な事件である。

挿絵であるが、ダヴィデとゴリアテの背後にはそれぞれピンク色の山と青い山が聳え、二人の間の背景には深い峡谷ができています。これは列王書第一の「異邦人ども²³⁾は一方の山に、イスラエルびとは谷を挟んでもう一方の山に陣取った」(17: 3) という記述に合致する。画面が単調になるのを避けるためか、上段と下段では左右の峰の色が入れ替わっているほか、下段では右側にもう一つ峰が出現している。また、ゴリアテの出で立ちも「頭に兜をかぶり、鎖帷子で武装し [……] 脚には青銅の脛当てを、そ



図6 「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」、キプロス島出土の銀製皿、メトロポリタン美術館

して肩の間には青銅の盾を身に着けていた」(王一 17: 5-6) にほぼ一致する。ゴリアテの盾や剣の鞘には偽クーフィー体様の文様が入っている。白い線で表されたニンブスをつけられたダヴィデは上半身を振ってゴリアテの方を振り返っており、その石投げには未だ3つの石らしきものが入っている。ダヴィデの左手は襟巻に完全に覆われている。こうしたダヴィデとゴリアテのポーズに近い最古の先行作例として、1902年にキプロス島で出土した銀製の皿が挙げられる(図6)。7世紀の制作と考えられるこの皿と、後の詩篇写本挿絵における「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」図像との関連はヴァイツマンが既に論じている²⁴⁾。ただし、相違点もある。当写本の上段のゴリアテは投げ槍をもはや背負ってはならず、まさにダヴィデに向けて投擲した瞬間が描かれている。また、キプロス銀皿におけるゴリアテの左腕は完全に盾に隠れていて見えないが、当写本では左腕が露出しており、盾の裏側が見えている。とはいえ、裏側であるにも拘らずキプロス銀皿の盾の表側と同様の文様が描かれている²⁵⁾。下段の斬首されるゴリアテの身体の向きも、キプロス銀皿と当写本では異なっている。こうした細かな相違点にまで目を向けると、むしろ現存する最古の貴族詩篇である《パリ詩篇》(フランス国立図書館、cod. gr. 139、10世紀) fol. 4vの方が当写本に近い。ただし、《パリ詩篇》ではまだ描かれていたゴリアテの盾持ちや「ディナミス(力)」と「アラゾニア(傲慢)」の擬人像²⁶⁾などは当写本では姿

を消しており、より単純化された段階に入っている。

この挿絵で不可解なのは銘文である。といっても、fol. 39v 同様白い絵具で書かれ、オリジナルの銘文と思われる上段の $\acute{\omicron} \Delta\alpha(\upsilon\iota)\delta / \acute{\omicron} \Gamma\omicron\lambda\iota\acute{\alpha}\delta$ ⁽²⁷⁾ (ダヴィデ／ゴリアテ) と下段の $\acute{\omicron} \Delta\alpha(\upsilon\iota)\delta \theta\acute{\upsilon}\omega\nu \Gamma\omicron\lambda\iota\acute{\alpha}\delta$ ⁽²⁸⁾ (ダヴィデがゴリアテを殺す) には特に問題はない。問題は、挿絵上部の欄外に後の手によって加えられた $\delta\omicron\iota\delta\alpha\sigma\tau\alpha\kappa\alpha\lambda\omicron\varsigma \pi\alpha\chi\omicron\nu \mu\iota\alpha\varsigma$ という茶インクの銘である。この銘文についてはカトラーが意味不明であるとして解読を断念している⁽²⁹⁾が、実見すると最後の1単語の摩耗が激しく、判別がつかない。ただし、最後の1単語を別にしても、 $\delta\omicron\iota\delta\alpha\sigma\tau\alpha\kappa\alpha\lambda\omicron\varsigma \pi\alpha\chi\omicron\nu$ という2単語は今のところどのような辞書にも見当たらない。さらに、上段の $\acute{\omicron} \Delta\alpha(\upsilon\iota)\delta / \acute{\omicron} \Gamma\omicron\lambda\iota\acute{\alpha}\delta$ の間に、オリジナルの銘文を無視するかのような大きな文字で $\epsilon\iota\varsigma \acute{\alpha}\gamma\omicron\nu$ とある。これも茶色のインクで書かれているが、 $\delta\omicron\iota\delta\alpha\sigma\tau\alpha\kappa\alpha\lambda\omicron\varsigma \pi\alpha\chi\omicron\nu$ とは手が異なるように見える。

「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」(fol. 343v、図7)

「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」と同一フォリオのヴェルソに描かれており、青い植物文様状の枠を有する。しかし、これは恐らく銀が酸化した結果青色に見えているものと思われる



図7 「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」

る。後述するようにこの外枠がモーセの右手に一部重なっている点と、外枠と同じ色の絵具が fol. 394r のテキストの上に不用意な染みを作っている点から、外枠は後の手によって追加された可能性が高い。なぜこの挿絵にのみ銀の外枠が付加されたのか定かではない。

fol. 343v 前後の羊皮紙は極めて薄く、外枠の下塗りの赤い顔料が fols. 342v, 343r に裏写り⁽³⁰⁾している。枠内上段に紅海渡渉、下段に溺れるエジプト軍を配する。カトラーは枠上部に「より古い枠の一部と、消えかかった銘文」を観察した⁽³¹⁾が、fol. 344r の帯状ヘッドピースの一部および銘文と大きさや位置が一致するため、単なるオフセットと思われる。次葉から始まる第一頌歌(テキストは出エジプト記 15:1–19)が別名「モーセの第一頌歌」であり、紅海渡渉の際にモーセが神を讃えた歌であるので、本図はその挿絵と知れる。上段に $i(\sigma\rho\alpha)\eta\lambda \nu\iota\kappa\eta[.....]$ (イスラエルの勝利)、下段に $\alpha\iota\gamma\upsilon\pi\tau\iota\omega\nu \beta\acute{\upsilon}\theta\iota\sigma\iota\varsigma$ (エジプト人の浸水) の銘がそれぞれ白い絵具で入る。

上段は、紅海渡渉の一場面である。子どもを抱いた女を先頭に、イスラエル人が火の柱に導かれて水の引いた紅海と思しき大地を渡っている。挿絵だけを見るとまるで白昼の出来事のようにだが、火の柱は夜の間人々を導いた(出 13:21–22)とあるので、これは紛れもなく夜間の場面である。火の柱の上には青い天穹があり、神の右手が見えている。若い容貌のモーセは左手を少し挙げ、人々を先導するのではなく彼らの後ろに立ち、うっすらと白いニンブスの輪郭が見える。人々はみなモーセの方を振り返り、彼らとモーセの間には不自然なほどの空間が開いている。写本挿絵に限らず、他の紅海渡渉の図像を見ると、モーセがイスラエル人の殿を務めているときは、例外なく杖を用いて紅海に再び水を戻している場面である。「紅海渡渉」にはモーセが人々の先頭に立っている図像と、最後尾に立つ図像とがあり、後者はローマのヴィア・ラティーナのカタコンベの墓室CおよびO⁽³²⁾(4世紀ごろ)など早い時期から作例が散見される。この2つの作例は「紅海渡渉」、もしくは渡り終えた場面を水平方向に展開しており、こうしたレイアウトはドーラ・エウロポスの壁画や後のモーセ八大書の挿絵にも見受けられる。ところが、同じくローマのサンタ・サビーナ聖堂木彫扉(5世紀)のパネルの一つには、紅海を渡り終えたイスラエル人と海に呑まれるエジプト軍が

縦形の画面に収まるように配置されている³³⁾。これに類似する構図が《パリ詩篇》fol. 419v (図8) やヴァチカン聖使徒図書館 cod. gr. 342 (11世紀) fol.246v³⁴⁾で採用されている。この時点ではイスラエル人と紅海が縦に重なっているとはいえ、完全に区画を二段に分けた構成にはなっていない。11世紀後期から12世紀初頭にかけての作と推定されるベルリン3807番では既に当写本と同様の二段構成を採っている³⁵⁾ (図9)。この横方向の画面から縦方向の画面への変遷は、ヴァイツマンが七十人訳聖書の挿絵全般に見られると観察した「重ねられた2つの帯状画面が1つの場面に、もしくは2つのうち1つのみが選択されて全頁大挿絵となった³⁶⁾」という傾向と合致するのではないだろうか。これらの二段構成の「紅海渡渉」では、決まってモーセが紅海を閉じている場面が描かれているので、やはり当写本の場合もそうであろうと考えられる。人々がモーセの方を振り返っているのは、実はモーセではなく画面下部の海に水が戻り、エジプト軍が溺れている様子を見ているのかもしれない。ヴィア・ラティーナのカタコンベやサンタ・サビーナ聖堂木彫扉、ローマのサンタ・マリア・マッジョレ聖堂身廊モザイクなど、古い作例ではモーセが今しがた閉じた紅海の様子を見ようと振り返るイスラエル人が描かれていることが多い。

しかし、説明のつかない点が3点ある。まず、紅海を閉じる際に必須のはずの杖をモーセが右手に持っていない点である。これについては、外枠が後

補であるためなのであろうが、外枠が不用意にもモーセの右手を切断してしまっているため、杖は描かれていたが後から外枠に上塗りされてしまったのかもしれない。注視すると右手から一筋の濃い茶色の線が出ているようにも見えるが、これだけでは杖を持っていると断言できない。手の形状も、杖を持っているようではない。フッターはモーセの所作について「左側で沈んでいくファラオを指差している³⁷⁾」としているが、いずれにしろ下ではなく左というからには、やはり本来横方向に展開していた画面を縦に二分割した結果と見ているのだろう。次に、モーセが海を振り返らずに人々に顔を向けている点である。管見の限り、紅海を閉じる場面ではモーセは必ず半身を振って海に杖を挿し、顔は海に向けられている。人々を先導し、紅海に到着した、もしくは紅海を渡っていると思われる作例でも、モーセは前方に顔を向けていて、人々と対話している様子はない。当写本のモーセが左手を挙げているのは従来の「紅海渡渉」の図像に添っただけで、発話のしるしではないと思われるが、両眼は明らかに自らの先を行く群衆に向けられている。最後に、モーセとイスラエル人との間に距離がある点であ



図8 「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」、《パリ詩篇》



図9 「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」、ベルリン大学、Abteilung für christliche Archäologie und kirchliche Kunst, cod. 3807

る。これまでの「紅海渡渉」の図像では人々とモーセは一塊となって移動していて、モーセが群衆から切り離されて描かれたことはなかった。以上3点に何らかの意味があるのか、それともないのか、現時点では判断がつかないが今後も考慮していきたい。

下段の紅海で溺れるエジプト軍の馬はすべて足先を右に向けているが、これも元々水平方向に展開していた画面を垂直方向に2分割した結果と考えれば納得できる。波は渦のように表現され、エジプト軍の上にはうっすらと青色が重なっていて、彼らが水に浸ってしまっていることを示している。《パリ詩篇》やベルリン3807番ではエジプト人たちの身体や戦車の海に浸かっている部分は波の下にあって見えなように描かれている。当写本はラヴェンナのアリオス派洗礼堂ドーム中央部をはじめとした「キリストの洗礼」図のように、川や海を垂直方向に切断する視点が採られている。ビザンティン皇帝の出で立ちで左端の馬に騎乗するファラオに、擬人化された紅海が掴みかかって沈めようとしている。この擬人化された紅海の顔面を含めた上半身が剥落してしまっているが、薄布を纏っているようである。その足下には海底に這いつくばっている兵士がいる。ファラオの馬の下に転がっている円い物体は兵士の盾であろうか。画面右には5、6人の騎馬兵士の一団がいるが、彼らの背後には人数分以上の槍が見えているので、実際はもっと大人数の軍団を描いたつもりなのだろう。

類似する写本と今後の研究課題

ヨハン・ティッカーネンはビザンティン詩篇写本を挿絵の特徴や形式から余白詩篇と貴族詩篇の二種に大別した³⁸⁾。余白詩篇とは本文の余白部分に小さな挿絵を伴うもので、《クルドフ詩篇》(モスクワ国立歴史博物館 cod. gr. 129d, 9世紀)³⁹⁾や《テオドロス詩篇》(大英図書館 Add. 19. 352, 1066年)⁴⁰⁾など貴族詩篇より古いものが多く、9写本が現存する。修道院工房での制作が想定されるため、修道院詩篇とも呼ばれる。これに対して、《パリ詩篇》に代表される貴族詩篇とは全頁大挿絵が挿入されたもので、特にダヴィデの生涯に関する挿絵を多く有する。金箔をふんだんに使うなど余白詩篇よりも豪華な様相が目立つため、仮に貴族をパトロンと想定して貴族詩篇と呼ばれる。先述したように、こちらは58写本が現存する。本稿で取り上げたバロッチ15

番は貴族詩篇に属し、アンソニー・カトラーが著した貴族詩篇のカタログにも掲載されている⁴¹⁾。「11世紀が朗読用(年間を通じての)福音書抄本の時代とすれば、12世紀は大型バイブルや典礼用詩篇の全盛期⁴²⁾」とは辻佐保子の言であるが、余白詩篇に比べて圧倒的に残存作例の多い貴族詩篇は、12世紀ビザンティン美術を代表する一角を担っていると云えるのではないだろうか。

写本におけるテキストと挿絵の照応関係、つまり挿絵が挿入される位置を写本の装飾プログラムと捉えると、貴族詩篇は多少の異同があるとはいえ、概ね「詩篇第15篇、第77篇、第151篇、および各頌歌にのみ⁴³⁾」挿絵が入る。当写本の場合、第1篇の直前にフロンスティスピースとしての「ダヴィデの肖像」が加わるが、第15篇と第77篇の全頁大挿絵がなく、頌歌についても第一頌歌にのみ挿絵が伴うだけで、極めて単純なプログラムであると云える。先述の通り羊皮紙の質が悪く顔料が裏写りしているような箇所があることから、貴族詩篇として第一級の作例ではないことは自明であるが、かといって挿絵やパスカル・テーブルの装飾は決して劣っているとはいえない水準を呈している。このような写本は一体如何なる人物が注文し、如何なる工房で制作されたのだろうか。その謎に迫る上で鍵となるであろう写本が、既に引いたヒュートン図書館ギリシア語3番である。この写本も、パスカル・テーブルによりバロッチ15番と同じ1104/05年に制作されたことが判明している。ビザンティンの写本において、同じ年に制作された同一ジャンルの写本が現存する例は極めて稀である。また、2写本は制作年だけでなく、装飾プログラムや挿絵の様式まで酷似している。これまで2写本が同一工房で制作された可能性が検討されたことはなかったが、充分考察する意義のあるものと考えられる。さらに、ベルリン3807番とアトス山、ディオニシウ修道院65番も、それぞれ正確な年代は定かでないものの、挿絵の様式的に12世紀の作とされており、装飾プログラムや挿絵の様式が2写本と類似する。これら4写本を詳細に比較検討し、図像の細かな差異やクワイアの構成などの美術史的・写本学的分析を通じて注文主や制作工房について考察することは、貴族詩篇の研究全体にとって重要であると思われる。というのも、カトラーが1981年に上梓したカタログ以降、個別の作例について論じた研究を除き、貴族

詩篇の包括的な研究は殆ど進んでいないためである。カトラーはカタログ編に続いて研究編を出版する予定であったのだが、現在未出版のままであり、今後も出版される兆しがない。最古作例である《パリ詩篇》についてはヴァイツマン⁽⁴⁴⁾やプフタル⁽⁴⁵⁾などの碩学をはじめとして幾人もの研究者が長年様々な議論を行ってきたものの、目立った成果が得られなかった。したがって、《パリ詩篇》以外の作例に着目することが、今後の貴族詩篇研究を進展させる上で重要と考えられる。バロッチ 15 番およびこれに類似する 3 写本は、この目的を達成する上で適切な写本群と考えられる。

おわりに

以上、実見調査時の所見を交えつつ、バロッチ 15 番の挿絵について詳細な記述を行った。フロンティスピースの「ダヴィデの肖像」はダヴィデが献呈者像として機能していると考えられる、貴族詩篇における唯一の作例である。また、「紅海渡渉」はモーセとイスラエル人の間に不自然な空間が開いており、従来の「紅海渡渉」の図像に当てはまらない特異な点であると云える。装飾プログラムは極めて単純で、羊皮紙の質も決して最良とは云えない当写本であるが、図像学的に興味深い挿絵を有している。制作年が同じであるヒュートン図書館ギリシア語 3 番をはじめとして、当写本に類似する 3 写本と併せて検討していきたい。

図版出典

図 1：筆者撮影

図 2：筆者撮影

図 3：‘Digital Medieval Manuscripts at Houghton Library’, <http://ids.lib.harvard.edu/ids/view/48421526?buttons=y> (2017 年 5 月 13 日閲覧)

図 4：‘The Index of Christian Art’, <https://ica.princeton.edu/millet/display.php?country=Australia&site=&view=country&page=1&image=3386> (2017 年 5 月 13 日閲覧)

図 5：筆者撮影

図 6：K. Weitzmann, ‘Prolegomena to a Study of the Cyprus Plates’ *Metropolitan Museum Journal* 3 (1970), 98.

図 7：筆者撮影

図 8：‘BnF Gallica’, <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10515446x/f862.image> (2017 年 5 月 13 日閲覧)

図 9：A. Cutler, *The Aristocratic Psalters in Byzantium*, Paris 1981, 159.

注

(1) A. Rahlfs, *Verzeichnis der griechischen Handschriften des*

Alten Testaments, für das Septuaginta Unternehmen aufgestellt, Berlin 1914.

- (2) ボドリアン図書館のオンライン・サービス ‘Digital Bodleian’ で写本の全フォリオを閲覧可能である (<http://digital.bodleian.ox.ac.uk/inquire/p/5ffa40d9-11ec-4992-97ef-701bc22adba4>)。
- (3) A. Cutler, *The Aristocratic Psalters in Byzantium*, Paris 1981, 58–9.
- (4) I. Spatharakis, *Corpus of Dated Illuminated Greek Manuscripts: to The Year 1453*, Leiden 1981, v. 1, 38.
- (5) I. Hutter, *Corpus der byzantinischen Miniaturehandschriften*, Bd. 1, Stuttgart 1977, 54–5.
- (6) カトラーがカタログに記載した 54 写本のうち、縦 16cm 以下×横 12cm 以下の写本は当写本以外に 15 例を数える。後世に裁断されたものも多いとはいえ、ラウデンが指摘した通り貴族詩篇の 83% は高さ 24cm 未満に収まる。J. Lowden, ‘Observation on Illustrated Byzantine Psalters’, *The Art Bulletin* 70–2 (1988), 246.
- (7) 文献略号は以下に従う。CPG= M. Geerard; F. Glorie (eds.), *Clavis patrum graecorum*, Turnhout 1974–87., DOP= *Dumbarton Oaks Papers*, PG= J. P. Migne (ed.), *Patrologiae cursus completus, Series graeca*, Paris 1857–66.
- (8) <http://digital.bodleian.ox.ac.uk/inquire/Discover/Search/#/?p=c+0,t+,rsrs+0,rsps+10,fa+,so+ox%3Asort%5Easc,scids+,pid+5ba573ad-74df-46c8-82fe-5d677788f38c,vi+0b64317e-8b5d-41b4-992d-b65aa38f9e79> (2017 年 7 月 19 日閲覧)
- (9) <http://digital.bodleian.ox.ac.uk/inquire/Discover/Search/#/?p=c+0,t+,rsrs+0,rsps+10,fa+,so+ox%3Asort%5Easc,scids+,pid+5ba573ad-74df-46c8-82fe-5d677788f38c,vi+410e648d-49bf-4956-87a4-e0406ef9d360> (2017 年 7 月 19 日閲覧)
- (10) <http://digital.bodleian.ox.ac.uk/inquire/Discover/Search/#/?p=c+0,t+,rsrs+0,rsps+10,fa+,so+ox%3Asort%5Easc,scids+,pid+5ba573ad-74df-46c8-82fe-5d677788f38c,vi+1aaf9a8b-0ba1-406f-8438-e16032b25d6b> (2017 年 7 月 19 日閲覧)
- (11) 同様の茶インクのアラビア数字のナンバリングが fol. 8–9v の左上に「16」、fol. の左上にも「20」と確認できるが、これらが fol. 13r から開始するナンバリングと関連するものであるか定かではない。
- (12) ‘καὶ ἐράγασαν καὶ ἐνεπλήθησαν σφόδρα καὶ τὴν ἐπιθυμίαν αὐτῶν’.
- (13) Cutler (1981), 257.
- (14) フランス国立図書館のオンライン・サービス ‘BnF Gallica’ で閲覧可能。f. 15r (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b105389021/f3.image>) などに巻物を持つダヴィデが見られる。
- (15) Cutler (1981), 131ff.
- (16) カトラーがカタログで挙げた冊数は 58 であるが、ラウデンが指摘する通り、58 写本のうち nos. 1, 17, 27, 28 については同カタログで他の番号が割り振られた写本の断片である。したがって、これらを除いた 54 写本が実際の現存数である。Lowden (1988), 242, no.3
- (17) 《テオフィニス福音書》の基本的な情報については櫻井夕里子『『テオフィニス福音書』の柱頭聖人について』『美術史研究』44 (2006)、127–44 頁を参照。
- (18) Cutler (1981), 59.

- (19) このため、当初はギリシア語圏において後代に創作された外典的な章と考えられていたが、後に該当箇所の前半部が死海文書 11QPs^a (11Q5) に存在すると判明した。つまり、少なくとも詩篇 151 篇前半部はなんらかの理由でマソラ本文には継承されず、ギリシア語圏のみに伝わった比較的古いテキストと思われる。後半部については定かではない。しかし、未だに詩篇 151 篇はギリシア語圏で創作された外典的テキストであって、死海文書に登場するヘブライ語版はギリシア語版のヴァリエーションでしかないという見解も根強い。J. A. Sanders, 'Ps. 151 in 11QPs' *Zeitschrift für die Alttestamentliche Wissenschaft* 34 (1963), 73–86.
- (20) 'Οὗτος ὁ ψαλμὸς ἰδιόγραφος εἰς Δαυὶδ καὶ ἔξωθεν τοῦ ἀριθμοῦ ὅτε ἐμονομάχησεν τῷ Γολιάθ'. *Ibid.*, 77.
- (21) 七十人訳ではサムエル記上・下および列王記上・下を列王書第一～四とする。
- (22) ただしこの箇所を含む 17: 12–31 は七十人訳のテキストでは伝承されていない。ほかにも七十人訳ではマソラ本文の 17: 41, 50, 55–58 と 18: 1–5, 10–11, 17–19 に相当する箇所が欠落しており、結果的に「ダヴィデとゴリアテの闘い」の語りがマソラ本文のそれより簡略化されたものとなっている。
- (23) 文脈からベリシテ人を指しているのは明らかであるが、A. Pietersma; G. Wright (eds.), *A New English Translation of the Septuagint*, Oxford 2009, 260 では原文にある ἀλλόφυλοι に従って allophyles と訳出している。
- (24) K. Weitzmann, 'Prolegomena to a Study of the Cyprus Plates' *Metropolitan Museum Journal* 3 (1970), 97–111. また、日本語文献では永澤峻「もう一つのルネサンスのために——「ビザンティン古代」の代表的作例と見なされるキプロス島出土の 9 枚 1 組の「ダヴィデ伝」浮彫り銀皿 (7 世紀前半) に関する覚書 (1)」『和光大学表現学部紀要』11 (2010)、139–162 頁に詳しい。
- (25) E. T. De Wald, 'A Fragment of a Tenth-Century Byzantine Psalter in the Vatican Library' in W. Koehler (ed.), *Medieval Studies in Memory of A. Kingsley Porter*, Cambridge, Mass. 1939, 148.
- (26) 永澤峻「「ダヴィデとゴリアテの戦い」の図像の変遷——紀元後三世紀から十世紀まで——」『和光大学人文学部紀要』15 (1985)、66 頁。
- (27) ゴリアテの名は Γολιάθ と末尾にデルタではなくシータが来る場合が多く、当写本の詩篇 151 篇の題書きでも Γολιάθ となっている。しかし、本挿絵の銘文におけるゴリアテの名前は、カトラー、フッターの読みはともに ὁ Γολιάθ となっている。写字生と挿絵画家は別人であったのだろう。テキストと挿絵の割り付けに多大な苦勞を要する「段落式挿絵」を採用する写本と異なり、全頁大挿絵を採用する写本の場合は特に写字生と挿絵画家が連携せず別々に作業する傾向が強かったと辻佐保子は述べる。辻佐保子「ヴァチカン図書館新約聖書 (Vat. lat. 39) の解説」『中世写本の彩飾と挿絵——言葉と画像の研究——』岩波：1995 年、440 頁。
- (28) Hutter (1977), 55. 同じ箇所をカトラーは ὁ Δα(νι)δ[.....] οντα[.....] (ダヴィデは [.....] である [.....]) と読む。確かに問題の銘文は摩耗によって判読が難しくなっているが、カトラーの説だと明らかに文字数が余ってしまう上に、銘文の末尾にはゴリアテ (Γολιάθ) の δ (Δ) が確認できる。Cutler (1981), 59.
- (29) *Ibid.*
- (30) 同様の赤い枠の裏写りもしくはオフセットが fols. 195rv, 196rv にも見受けられる。しかし、これらのフォリオ周辺にはまったく挿絵や該当する枠の描かれたフォリオがない。Fols. 195r–196v には詩篇 76: 15–77: 6 のテキストが途切れることなく書かれているため、本来片面にのみ全頁大挿絵を有するシングルフォリオが挿入されていた可能性がある。シングルフォリオは抜け落ちてしまいやすいため、フォリオ欠落の如何を議論するのは困難であるが、今後当写本を再度調査する機会に恵まれた際の課題としたい。
- (31) *Ibid.*
- (32) 辻佐保子『ローマ サンタ・サビーナ教会木彫扉の研究』、中央公論美術出版：2003 年、60 頁。
- (33) 辻佐保子、同書、8 頁。
- (34) Cutler (1981), 214.
- (35) Cutler (1981), 159.
- (36) K. Weitzmann, 'The Ode Pictures of the Aristocratic Psalter Recension', *DOP* 30 (1976), 68.
- (37) Hutter (1977), 55.
- (38) J. J. Tikkanen, *Die Psalterillustration im Mittelalter*, Leipzig 1895–1900.
- (39) 研究史を含めた議論は高晟俊「《フルドフ詩篇》(モスクワ国立歴史博物館所蔵 Cod. gr. 129d) に関する諸問題」『新潟県立万代島美術館研究紀要』2 (2007)、9–31 頁を参照。
- (40) 辻絵理子「ビザンティン余白詩篇研究：『テオドロス詩篇』とストゥディオス修道院工房」、早稲田大学、2012 年、博士論文。
- (41) Cutler (1981), 58–59.
- (42) 辻佐保子、1995 年、440 頁。
- (43) S. Der Nersessian, 'A Psalter and New Testament Manuscript at Dumbarton Oaks', *DOP* 19 (1965), 166–67.
- (44) K. Weitzmann, 'Der Paris Psalter ms. grec. 139 und die mittelbyzantinische Renaissance', *Jahrbuch für Kunstwissenschaft*, (1929), 178–94.
- (45) H. Buchthal, *The Miniatures of the Paris Psalter: A Study in Middle Byzantine Painting*, Nendeln 1968.